様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００９７８

研究課題名（和文）東南院文書成立過程の研究

研究課題名（英文）Research on establishment process of the Documents of Tonan-in

研究代表者
森　哲也（MORI, Tetsuya）

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：５０３１５０２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：東南院文書のうち、料紙面に折本状の痕跡（山折・谷折・綴穴）を確認できる17巻を対象に、現状を一覧表化した上で、残された痕跡の状況と、文書目録・文書出納日記の記載（帖・造紙・雙紙）との比較を行い、折本状の痕跡は、院政期の東大寺別当寛信による文書整理の結果を示すことを明らかにした。さらに、それが現在の巻子装へと変化した時期に関し、江戸期の点検記録の検討から、天和元（1681）年～享保６（1721）年の間のことであることを導き、写本との比較等により、天保９（1838）年～同11年の間に手が加えられた巻の存在も判明するなど、東南院文書の現状成立過程の具体相を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
院政期の東大寺別当寛信が行った伝来文書の整理（貼継ぎ・成巻）は、散逸を防ぐ上では有効である一方、まとめられた文書を参照する際の不便を生じる。そこで、必要頻度の高いものを折本状にすることで、その不便を解消したと理解される。これは、個々の文書が活用される価値を有していたからこその措置であり、それが巻子装になるのは、そうした価値や意義が失われた（第一義ではなくなった）ことを意味し、古物になったことを示すと評価できる。そうした観点に立ち、他の文書群に関しても文書が整理された形態と、文書の効力の関係等について、再検討する必要があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this reseach,at first,I performed basic observation of the Documents of Tonan-in(especially about 17scrolls, traces of folding can be confirmed on the paper surface),and listed their current status.Next,I compared those traces to description of monjyomokurou(The catalog of documents of Todaiji tenple),so I found,those traces show the results of document arrangement by Todaiji Betto(head administrator) Kanshin during the Insei period. Furthermore, regarding the time when they changed to the current scroll binding, from the examination of the inspection records of the Edo period, it was derived that it was between 1681 and 1721. And through comparison with manuscripts, I found scrolls that were modified between 1838 and 1838. In this way,I was able to show the specific aspects of the process of establishing the Documents of Tonan-in.

研究分野：日本史、史料学

キーワード：東南院文書　東大寺文書　東大寺　正倉院　史料学　古文書学　日本史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

歴史叙述にあたり、古文書が重要な史料の一群であることはいうまでもない。しかし、かつて網野善彦氏が、東寺の荘園研究ひいては荘園史研究そのものの重大な弱点は「寺院文書の伝来についての研究、史料学的な研究を怠ってきたところから生じたといっても過言ではない」（『網野善彦著作集第 1 巻 中世東寺と東寺領荘園』序章第 2 節、岩波書店、2007 年、原著 1978 年）と指摘したように、古文書については個々の内容把握だけではなく、文書群を総体として把握し、それがいかなる基準で形成・保管され現在まで伝来してきたかという、文書群としての生態を明らかにする必要がある。その意味において、文書群としての東大寺文書の通史的把握は、不十分であったといわざるをえない。

そこで、東大寺文書と、その中の小文書群である末寺観世音寺の関係文書を対象とし、形成から現在に至るまでを射程に入れて総合的・通史的な分析を進めることとし、学位請求論文「東大寺文書の形成と伝来に関する基礎的研究」を九州大学に提出し、博士（文学）の学位を授与された。それを踏まえ、平成 28～30 年度 JSPS 科研費「東大寺文書目録・写本・点検記録の基礎的研究」（基盤研究（C）、課題番号 16K03017）では、標記史料の基礎的な集成・分析を行っており、これは、文書目録・写本・点検記録という「外部からの視点」に立った東大寺文書の生態分析と位置付けられる。

それと同時に、「もの」としての個別文書、それらをまとめた巻子に残された、現在に至るまでの痕跡を探る、「内部からの視点」に立つ分析も重要である。その観点からいえば、公験としての東大寺文書の中核をなす東南院文書に関しては、全面的検討は果たせていない。そこで、科研費の交付を得て、東南院文書を対象に据え、「内部からの視点」と「外部からの視点」による現状成立過程とその意義の解明を目指したのである。

東南院文書は、これまで大日本古文書（編年文書、家わけ第 18 東大寺文書 1～3）等に活字化され、幅広く研究に利用されてきたが、「内部からの視点」による考察は、任牒に関する石田実洋氏「東大寺道別当牒の基礎的考察」（『正倉院文書研究』7、2001 年）を除けば、ほとんど確認できない。これは、正倉院展に出陳される場合を除き現物閲覧が困難であること、頒布されているマイクロフィルムもモノクロで必ずしも鮮明とはいえないこと、等が影響していたと思われる。そうした中、平成 19～23 年度科学研究費補助金（学術創成研究費）「目録学の構築と古典学の再生－天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明－」（研究代表者　田島公氏〈東京大学史料編纂所教授〉）による、カラーデジタル高精細画像（以下、デジタル画像）の公開は（2014 年 6 月、東京大学史料編纂所図書室）、画期的なできごとであった。にもかかわらず、それを活用した「もの」としての東南院文書研究は、現段階まで把握できていない。

しかし、遠藤基郎氏（東京大学史料編纂所）の教示により、デジタル画像を部分的に点検したところ、一定間隔を置いて連続する規則的な縦の折線（山折・谷折）と、それを挟んで線対称となる虫損、綴穴の痕跡を確認できた。これは、ある時期、巻子が折本状であったことを示している。加えて、平成 25～27 年度の間、東京大学史料編纂所特定共同研究「9・10 世紀古文書に関する史料学情報の総合化研究」の調査に参加した際、寺外流出の東大寺文書中に、同様の痕跡を残すものが見出された。東南院文書には、配列が乱れた個所、表題や点検記録の記載と数量が一致しない巻子等が存在する。上記デジタル画像は、マイクロフィルムでは不鮮明であった表題や付箋の文字、紙継目の状態も明瞭に読み取り可能で、誤りが見られた紙数表示も是正されるなど、原本熟覧が難しい東南院文書研究に重要な手がかりを与えてくれるのである。したがって、その積極的活用と同時に、東大寺内に残る分を始め、現在では寺外に流出している関係文書の調査を行い、料紙に残る痕跡や年次等を手がかりに原状復原を行い、東南院文書の現状成立過程を明らかにすることができる。

それに「外部からの視点」の成果を加えることで、より具体的な像が結べると考えている。すなわち、文書目録や文書出納日記には、東南院文書に比定される文書に関し、数量のみならず、各時期の形態を知る記述が残されている。また、近世～近代の点検記録や写本にも、当時の状況や現在未確認の文書、巻子の存在が記録されており、これらを合わせて検討することで、東南院文書の現状成立過程と、その意義の解明が可能となると考えられる。

２．研究の目的

東南院文書は現在、宮内庁正倉院事務所の所管にかかるが、これは明治期に東大寺から皇室に献納されたことに由来し、本来は東大寺図書館現蔵の成巻文書（百巻文書）等と合わせ、東大寺文書として扱われるべき文書群である。その中心となる東大寺創建期～院政期の文書は、封戸、荘園、修造関係、別当・三綱・俗別当の補任等にわたり、いずれも東大寺にとって重要な公験類である。したがって、その分析は、東大寺文書の生態を追究する研究の中心的課題といってよい。

本研究では、東大寺文書の史料学、史料伝来論の深化のため、画期的でありながら現段階まで具体的利用が見られないデジタル画像の積極的活用により、従来、全面的に行われたことがなかった、「内部からの視点」に立つ東南院文書の分析を実施する。同時に、文書目録・文書出

納日記・点検記録・写本の調査成果を踏まえた、「外部からの視点」による考察結果を融合することで、東南院文書の現状成立過程と、各時期における東大寺内の状況、東大寺をとりまく社会動向との関係について明らかにする。

３．研究の方法

（１）デジタル画像による東南院文書の現状把握

東京大学史料編纂所において公開されているデジタル画像を熟覧し、「内部からの視点」に立ちつつ東南院文書各巻の現状を把握する。具体的には、山折・谷折・綴穴や虫損の痕跡、間隔等を追跡し、所収文書の配列や乱れ、各巻表題の記載内容と所収文書の異同等に注目して現状を把握し、可能な限り判りやすい形で整理し分析を進める。

（２）文書目録・文書出納日記・点検記録・写本の検討

院政期～鎌倉期に作成された各種文書目録、東大寺印蔵保管文書の出納簿たる文書出納日記、江戸期の史料採訪等により残された点検記録から、東南院文書に関わる記載を抽出し（文書名、数量、形態等）、各時期の状況と東南院文書の現状と比較して「外部からの視点」に立った考察を行う。

（３）東大寺内外に所在する関係文書の調査と分析

東大寺図書館架蔵の関係文書、現在では東大寺外に流出している関係文書を調査し、料紙面に残る痕跡等を確認する。その上で年紀や東南院文書の現状等をもとに、接続関係や原位置の推定を行う。

４．研究成果

（１）東南院文書の成立過程

デジタル画像の熟覧により、料紙面に折本状の痕跡（山折・谷折・綴穴）が残る東南院文書が 17 巻存在することを確認し（第 1 櫃第 1 巻～第 7 巻、第 9 巻、第 2 櫃第 1 巻～第 5 巻、第 3 櫃第 18 巻、第 4 櫃附録第 1 巻、第 5 櫃第 12 巻、第 15 巻。＊所収文書すべてではない巻を含む）、その状況を一覧表として整理した。これらは関係する文書の内容が、任牒のみならず、封戸、修造等にも及ぶこと、山折・谷折・綴穴の連続性、等から見て、文書を貼り継いだ上で折本状にしたものである。その時期は、文書目録・文書出納日記に見える関係記載（帖・造紙・雙紙）を勘案すると、院政期の東大寺別当寛信による文書整理の際と結論できる。

折本状から現在のような巻子装となったのは、江戸期の点検記録に基づくと、天和元（1681）年～享保 6（1711）年の間のことであり、その後、第 1 櫃第 9 巻のように、天保 9（1838）年～同 11 年の間に手が加えられた巻もあるなど、種々の過程を経て現状が成立すると考えられるが、成立過程の全体像解明については、今後も検討を加える必要がある。

折本状の措置の意義については以下のように理解している。すなわち、寛信は東大寺伝来の公験類の保全を図り、それらを分類・整理し、貼り継いで続文の状態にしたと考えられるが、これは、散逸を防ぐためには有効である一方、所収文書を参照する際の不便が生じる。そこで、必要頻度の高いものを折本状にすることで、不便を解消したと判断される。これは、個々の文書が活用される価値を有していたからこその措置であり、それが巻子装になるのは、そうした価値や意義が失われた（第一義ではなくなった）ことを意味し、古物となったことを示している。この観点に立ち、他の古典籍や文書群についても検討を加えること、整理された文書の形態と文書の効力との関係についても、さらに分析を加える必要があろう。

（２）関係文書の調査と分析

東大寺図書館に架蔵される関係文書のうち、寛治 8（1094）年頃かと推定される東大寺封戸文書書上〔未成巻文書第 2 部 136〕、長洲荘相論文書〔同第 1 部第 24－655－1、2〕の調査を行い、前者が現東南院文書第 2 櫃第 1 巻の封戸関係文書下巻に対する上巻の一部に相当すること、後者が第 5 櫃第 12 巻から接続すると見られること、両者の計測から山折－谷折の間隔が約 30 ㎝弱であること等が確認できた。また、実見は果たせなかったが、東京大学史料編纂所架蔵の写真帳により、国立公文書館（内閣文庫）所蔵の東大寺文書の中に折本状の痕跡を留めるものが存在することが判明し、それらは後者から接続し東大寺領摂津国猪名・長洲荘の公験としてまとめられていたことが想定される。

寺外流出の関係文書のうち、九州国立博物館所蔵文書、兵庫県立歴史博物館所蔵文書、古代学協会所蔵文書について調査を行い、山折・谷折・綴穴の痕跡を確認し、原位置の推定等を行うことができた。ただ、コロナ禍の影響をうけ、予定の調査が未了となったものもあるので、今後、別の機会を得て調査を進めたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 森　哲也	４．巻 876
２．論文標題 『東大寺古文書』と『諸文書部類』の意義	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本歴史	６．最初と最後の頁 ４６～５６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森哲也	４．巻 88
２．論文標題 『東大寺古文書』と『諸文書部類』－東大寺文書写本の紹介－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 古文書研究	６．最初と最後の頁 92～111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森哲也	４．巻 417
２．論文標題 駅鈴と万葉歌	５．発行年 2019年
３．雑誌名 續日本紀研究	６．最初と最後の頁 18～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 一瀬智・森哲也
２．発表標題 九州国立博物館所蔵の東大寺文書
３．学会等名 2019年度九州史学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 森哲也、三輪眞嗣	4．発行年 2021年
2．出版社 東京大学史料編纂所	5．総ページ数 238
3．書名 観世音寺公験案の集成と研究（東京大学史料編纂所研究成果報告書2021－5）	

1．著者名 坂上康俊、延敏洙、堀江潔、柴田博子、河上麻由子、重松敏彦、永山修一、森哲也、田渕義樹、吉永匡史、細井浩志、山下洋平、渡部史之、末松剛、松薗斉	4．発行年 2022年
2．出版社 高志書院	5．総ページ数 370
3．書名 古代中世の九州と交流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書として『東南院文書成立過程の研究』（2023年3月、全118頁、査読無）を刊行した。

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関